

義父と嫁

第一卷

ゲリラ豪雨に襲われた人妻

海老沢 薫 著

## 内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 雨に濡れていく美人妻の体

■ 第二章 義父に覗かれた浴室

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/>

■ 著作権について

「義父と嫁 第一巻 ゲリラ豪雨に襲われた人妻」(以下本書と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー)により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第61条などの罰則がありますのでご注意ください。  
い。

■ まえがき

二十八歳の人妻、大神環奈は二年前に五歳年上の正彦と結婚し、幸せな新婚生活を送っていた。しかし、新婚数カ月が過ぎた頃、夫の強い要望により夫の実家で独り暮らしをしていた義父の勇蔵と三人で同居生活をするこ

とになる。

愛する夫のために我慢して同居生活を続ける環奈であつたが、月日が過ぎるにつれて義父、勇蔵が自分に対して淫らな感情を抱いて

いることに気づき戸惑う。

そんな中、夫の二歳年上の姉、美奈子が離婚して実家に出戻り、さらに、転勤が決まつた夫が単身赴任で家を離れることになり、環奈を取り巻く生活環境は一変する。

夫がいらない寂しさを抱えながら、自分のことを厭らしい目で見つめる義父と、気が強

自分のことを召使いのように扱う義姉の三人で暮らす羽目になった環奈。

ある日、いつものように近所のスーパーに  
買い物に出かけた環奈は、帰り道に突然のゲ  
リラ豪雨に襲われてしまう。傘を持たない環  
奈は両手に買い物袋を提げたまま、激しく降  
りしきる雨の中をびしょ濡れになりながら走  
って家に帰った。  
白いワンピースはピッタリと体に貼り付き  
肌が透け、セクシーな下着まで丸見えとなり、  
道行く人々の好奇の視線に晒されながら、ど  
うにか家に辿り着いた環奈。  
すぐに浴室に行きシャワーを浴びた環奈は  
いつしか夫のいない生活で満たされない体を  
慰めようとオ○ニーに耽っていた。  
やがて、シャワーを浴びながら絶頂した環  
奈は、雨の止んだ窓の外から義父の勇蔵が浴  
室の中を覗いていることに気付いたのだった  
同じ屋根の下で暮らす義父に、自らのオ○ニ  
ーする姿や絶頂の瞬間を目撃されてしまった  
ことにショックを受ける。

しかし、それは環奈にとってこれから始まる大なる羞恥地獄のはじまりに過ぎなかつた。  
浴室から出た環奈は、脱衣所に置いてあるはずのタオルや、さっき脱いだばかりの服や下着が無くなっていることに気付き慌てる。それでも覚悟を決めた環奈は素っ裸のまま脱衣所を飛び出し、着替えのある二階の自分の部屋に向かって走った。しかし、なぜか自分の部屋の扉に鍵が掛っており、家の廊下に素っ裸のまま立ち尽くす環奈。  
するとその時、階段を上り二階へとやって来る何者かの足音が聞こえてきたのだった。

■ 第一章 雨に濡れていく美人妻の体

素肌が濡れるのを感じた環奈がふと空を見上げる、さっきまで晴れ渡っていた青色はいつしかグレーに変わり、さらに黒色へと変わろうとしていた。そして、どんよりとした空からは一粒二粒と雨の滴が零れ落ち、傘を持たない環奈の体を濡らしていった。急いで帰らなくちゃ。・・。環奈は空から降り注ぐ雨粒が次第に激しくなってくると、両手に買いい物袋を提げたまま小走りに道を駆けだした。二十八歳の人妻、大神環奈は近所のスーパーに食料品を買い物に行った帰り道だった。スーパーから自宅までは徒歩十分ほどかかり、環奈は激しく降りしきる雨の中を走り続けなければならなかった。しかし、両手に提げている買い物袋には沢山の食材が詰め込まれていて、その重みに体力を奪われ思うように走ることができなかつた。

小走りで駆けたり、疲れて立ち止まったりを繰り返している間に、空から降り注ぐ雨粒によって環奈の身に纏っている白いワンピースはびっしょりと濡れ、体に貼り付いて肌が露わとなっていた。ああん、どうしよう・・。雨に濡れた服の生地奥から下着が透けてくつきりと浮き上がっているのに気付いた環奈は、思わず道の途中で立ち止まり、羞恥に体を震わせた。

環奈が身に纏っている白いワンピースは生地が薄く、雨に濡れたその奥から黄色のブラとパンティーがはつきりと見えてしまい、しかも、今日穿いている下着は、清楚な環奈が持つている下着の中で一番セクシーな物で、パンティーの生地面積は小さく形良いお尻が半分以上丸出しになっていたのだ。

環奈は、よりによってこんな時に生地薄い白いワンピースやセクシーなパンティーを身に付けてきた事を心から後悔した。自宅へ戻るまでの道は比較的交通量も多く、今も何



台もの車が傍を通り過ぎていた。きっと車に乗っている人達は、ゲリラ豪雨の中を両手に  
買った物袋を提げて歩く美女の姿を見て、可哀  
そうにと嘲笑い、そのびつしよりと濡れた白  
いワンピースの奥から覗くセクシーな下着を  
眺めているに違いなかった。  
そして、環奈の傍を歩いている傘を差した  
主婦やサラリーマン達は薄笑いを浮かべなが  
ら、びしょ濡れの美女を見つめ通り過ぎて行  
った。彼らは皆、環奈の濡れたワンピースか  
ら透けた体を上から下まで舐め回すように見  
つめ、美女のセクシーな肢体をしつかりと鑑  
賞していた。  
いやああん、恥ずかしい・・・。ゲリラ豪  
雨というハプニングに見舞われ、公衆の面前  
で半裸姿になってしまった環奈は恥ずかしく  
て堪らず、再び雨の中を懸命に走り始めた。  
走っているうちに濡れたワンピースがお尻の  
割れ目に食い込むように貼り付き、形良いお  
尻の形が丸見えとなり、びつしよりと濡れた

髪は頬に貼り付き、清楚な美人妻は何とも艶めかしい姿へと変貌していった。  
環奈が数十メートルほど走って立ち止まり呼吸を整えていると、すぐ傍を歩く傘を差し、た中年女性達が、びしょ濡れの環奈に気付き驚いた様子で視線を向けてきた。  
「まあ、何よあの雨に濡れて下着が丸出しじゃない。みっともないわねえへ笑」  
「まあ、黄色の下着だわ。もしかしてわざと雨に濡れて、下着を見せびらかしてるんじゃないのへ笑」  
「いやねえ、それじゃあ露出狂ってこと？世の中にはああいう女もいるのねえ。まったく嘆かわしいわ」  
中年女性達は、自分達より若く美しい環奈の濡れた肢体を眺めながら嘲笑した。  
私、そんな女じゃない。お願い、そんなに見ないでください。彼女達の声を聞いたら環奈は居たたまらない気持ちになり、逃げよう。雨の中を走り出した。空からは雷鳴

が轟き、雨はますます激しくなっていた。  
体に打ちつける雨の滴に微かな痛みを感じな  
がらも、環奈は羞恥心に煽られるように走り  
続けた。きつと近くを通り過ぎる車や歩行者  
からは下着姿の女が走っているように見えて  
いるのだろう。いつも歩いている馴染みの場  
所をこんな破廉恥な恰好で走っていることが  
環奈には恥ずかしくて堪らず、知り合いに見  
られたりしないかと気が気ではなかった。  
やがて、降りしきる雨の中を懸命に走り続  
けると、視線の先によりやく家が見えてきた  
思わずホッとして立ち止まった環奈の白いワ  
ンピースは、体にベッタリと貼り付いて上か  
ら下まで完全に透けてしまい、遠くから見れ  
ば下着姿の女性が路上に立っているようにし  
か見えなかった。あともう少しで家に帰れる  
わ・・°。すっかり息を切らしている環奈は  
心の中でそう自分自身に言い聞かせ、最後の  
力を振り絞って家に向かって走った。

階建ての木造家屋であつた。二年前に五歳年上の夫、正彦と結婚した後、新婚数カ月の時に夫の強い要望によつて、夫の生まれ育つた実家であるこの家で暮らす事になつたのだ。夫の母親は夫がまだ中学生の時に死別して、夫のため、この家には夫の父親、勇蔵が一人で暮らしており、環奈は新婚であるにも関わらず義父と同居をすることになつたのだつた。義父には決して悪い印象を抱いていなかった。た環奈だつたが、いざ同居を始めてみると義父がいてることとで何かと氣を遣い、夫と二人きりの甘い新婚生活を満喫したかつた環奈にとつては息苦しい日々を送る事になつた。さらに、追い打ちを掛けるようについ数カ月前に環奈にとって義姉に当たる夫の二歳年上の姉美奈子が離婚して実家に戻つてきたため、今は、夫の六十六歳になる父親と三十五歳の姉と共に一つ屋根の下で暮らしていたのだつた。そして、家の家事全般を任されることになつた環奈は、今日も日課である食料品の買い出

しのため一人ですーパーまで買い物に行つていたのだ。ようやく家の玄関の前に辿り着いた環奈は肩に下げていた小さな鞆から鍵を取り出し、玄関の扉を開けた。家の中へ入ると、明かりが漏れている奥の部屋からテレビの音が聞こえてきた。それは、一日中家の中でドラドラと過ごしている義姉がいつも見ている午後の情報番組のようであつた。どうして私だけこんな目に遭わなきゃいけないの・・・。ソファに寝転びながらのんびりとテレビを見ている義姉の姿が脳裏に浮かび、環奈は憤りを感じながら、買い物袋をとりあえず玄関に置いて、濡れた服を着替えるために洗面所の方に向かった。

びっしりと濡れた環奈の体から水滴がポタポタと廊下に垂れ落ち、一筋の道を描いた。そして、その道が洗面所に繋がろうとしたその時だった。洗面所の近くにあり、トイレから水が流れる音が聞こえたかと思うと、環奈の

目の前でトイレの扉が開き、中から義父の勇蔵が出てきた。「きゃっ」

勇蔵と目が合った環奈は思わず小さな悲鳴を上げ、慌てて両手で体を隠した。

「環奈さん、どうしたんだ。びしょ濡れじゃないか」

環奈の姿を見た勇蔵は驚いた様子でそう言うのと、義理の娘の濡れた体を頭の上から脚の先まで舐め回すように露骨な視線を向けた。

「スーパーから帰る途中に急に雨が降り出してしまったって・・・ああん、ごめんなさい」

環奈は顔を真っ赤に染めながらそう言うのと、濡れた体に纏わりつく義父の厭らしい視線から逃れるように洗面所に駆けこんだ。

夫の実家であるこの家で義父と同居するようになったから、環奈は自分を見る義父の目に男としての欲情が混じっていることにだんだん気が付き始めていた。それでも最初の頃はなるべく気にしないようにしていたが、月日

が流れるにつれ義父の目はギラギラと輝きを  
増して、まるで妄想の世界の中で自分のこと  
を姦しているのではないかと疑う程になって  
いった。  
そして、環奈の夫、正彦がつい一カ月前に  
単身赴任となってこの家を離れてからは、義  
父、勇蔵の視線はより露骨なものとなり、さ  
っきのように至近距離から体を舐め回すよう  
に見つめてきたり、何かにつけてボディタッ  
チしてくるなど、環奈に対する欲情を露わに  
してきたのだ。  
夫の転勤が決まった時、環奈は自分も一緒  
に付いていきたいと夫に何度もお願いしたが  
年老いた父親のことを見守って欲しいと夫に  
説得され、泣く泣く夫の実家に一人残り、義  
父と義姉の三人で暮らすことになったのだっ  
た。  
それから一カ月が経ち、環奈は毎日針の筵  
にしているような気分での家で暮らしていた。  
義父の欲情滾る視線に晒されるだけでなく、

離婚して実家に出戻りしてきた義姉は、自分より若くて美しい新婚の幸せオーラを放っている。環奈に激しく嫉妬し、環奈のことをまるで召使いのように扱き使ったのだ。

洗面所で雨に濡れたワンピースと下着を脱いで裸になった環奈は、そうした憂鬱をも洗い流すために浴室へと入っていった。



■ 第二章 義父に覗かれた浴室

それは外で降りしきる雨の音ではなかった。環奈がシャワーを浴びていると、浴室の床に打ちつけるシャワーの水しぶきの音に紛れて、なにか物音のようなものがか聞こえた。しかし、環奈はその音を特に気にしなかった。それよりも、シャワーから放たれるお湯を全身に浴びていると、なぜか下半身の方から火照り出し、無意識の内に環奈はシャワーヘッドを股間の方に近づけ、シャワーの水圧で秘部を刺激していたのだった。

「ああん」

環奈の口元からは喘ぎ声が漏れ、もう片方の手で今度は乳房を弄り始めた。

新婚の夫が単身赴任になり離れて暮らすようになってから、若い美人妻の体は渴き、いつも疼いていたのだった。愛する夫と触れ合うことのできない寂しさ、ストレスの溜まる

生活の中で満たされることのない心。遠く離れた場所にいる夫を想うと、どうしようもな  
く体が火照り、義父や義姉に気を遣う必要の  
ないこの場所で、環奈は体の芯から迸る欲情  
を解き放ちたかった。  
「ああん、ああん」  
浴室には環奈の喘ぎ声が響き渡り、その声は  
とても清楚で知的な美人妻の声とは思えない  
ほどエッチで、オスを求めるメスの鳴き声の  
ように聞こえた。  
さっきまで降りしきっていた雨はいつの間  
にか止み、浴室の窓からは陽が注いでいた。  
そして、その窓は僅かに開き、窓の隙間から  
陽の光よりもギラギラと光る目が浴室の中を  
覗いていた。雨上がりの庭先に立ち浴室の中  
を覗いていたのは他ならぬ勇蔵であった。勇  
蔵は、びしょ濡れの環奈がシャワーを浴びる  
と分かるやいなやすぐに庭先に出て浴室の窓  
に近づいたのだった。勇蔵が庭に出ると、そ  
の欲情に応えるかのよう。空は急に晴れ渡り

勇蔵はそつと浴室の窓を数センチ開けて、シヤワーを浴びる環奈の裸を目撃することになった。想像以上にスケベな体をしておる・・・。環奈の裸を初めて見た勇蔵は興奮し目を血走らせた。息子の正彦が初めて環奈を家に連れて来て紹介された時から、勇蔵は環奈の事を性的対象として見ていた。こんな若く美しい女を死ぬまでに一度でいいから抱いてみたい。その熟れた体を隅から隅まで存分に味わい尽くしたい・・・。それが妻を失ってから女性く柔肌に触れたことさえない勇蔵の生きる目標となった。息子の正彦は、父親の胸の奥に潜むそんな邪な想いなど知らず、環奈と結婚してから半年も経たない内に、独りで暮らす年老いた父親を見守るために、新婚の環奈を説得して三人で実家に同居することにしたのだった。息子夫婦と同居する事になった時、勇蔵は心の底から喜んだ。息子に「ありがとう」と目を

潤ませながら感謝の言葉を伝えた勇蔵は、胸の奥では義理の娘である環奈のことに思いを巡らせていた。初めて会った時から胸の奥に抱いていた男としての欲望をどうやって叶えるか、そればかりを考え、勇蔵は同じ一つ屋根の下で暮らしながら、若く美しい息子の嫁の体を影から鑑賞し、妄想の世界で環奈を弄んでいた。息子には悪いが、いつかこの女を抱いてやる。そんな勇蔵の強い思いが通じたのか、正彦の転勤によって環奈を自分のモノにするための邪魔者は消えたのだった。娘の美奈子も同じ屋根の下に暮らしていたが、バツイチで居候の身である美奈子は、勇蔵には寛容な姿勢を示しており、また、父親の勇蔵が環奈を性的対象として見ている事に何となく気付きながら、それを面白そうに眺めているだけだったため、勇蔵は娘の美奈子には何も臆する事はなかった。浴室の窓の隙間から中を覗いている勇蔵は

清楚で控えめな息子の嫁が見せるまさかの行為に驚きの表情を浮かべながら下半身を痛いくらいに膨らませていた。  
「ああん、ああん」  
環奈の喘ぎ声は窓の隙間から庭先まで聞こえてきて、初めて聞く息子の嫁の厭らしい声に勇蔵は耳を澄ませた。良い声出して鳴きおるわ・・。目の前でシャワーを浴びながらオニ―に耽る息子の嫁の姿に、勇蔵は満面の笑みを浮かべ、その姿をしつかりと脳裏に焼き付けた。  
それは、勇蔵にとってまさに夢のような光景であつた。豊満な乳房の頂きにある綺麗なピンク色の乳首、括れたウエスト、股間に生えた黒い茂み、形良いお尻、そのどれもが今まで頭の中で勝手に妄想していた裸以上の魅惑的なものであつた。そして、厭らしい喘ぎ声を漏らしながらオニ―に耽るその姿も、これまで妄想の世界で思い描いていたどんな痴態よりも刺激的で艶めかしかった。

勇蔵はどれくらいぶにか分らない程に高揚し、環奈のオ○ニーを覗きながら自らもイチモツに手を伸ばし弄り始めていた。「ああん、もうダメえ、ああんイクっイクっイクっイクっ」環奈は大きな声を上げると、下半身を激しく痙攣させ、浴室の床に座り込んだ。「オオっ」息子の嫁の絶頂の瞬間を一メートルしか離れていない場所で目撃した勇蔵は、思わず感嘆の声を漏らした。そして、環奈のイキ果てた姿を見ながら勇蔵も射精したのだった。

浴室の床に座り込んだまま絶頂の余韻に浸っていた環奈は、ふと窓の外に人の気配を感じ、何気なく視線を向けた。

「キャッ」窓の方を見た環奈は、僅かに開いた隙間から義父の勇蔵がこちらを覗いているのが分かり、小さな悲鳴を上げた。そして、環奈と目が合

つてしまった勇蔵は慌てて窓を閉め、すぐにその場から逃げた。それはほんの一瞬の出来事であつたが、義父と嫁の関係が大きく動き出していく一端となつた。浴室でシャワーに打たれている環奈は、両手でガッチリと体を抱きしめながら震えていた。義理の父親に裸を見られてしまつた。きつと、オ○ニーの一部始終まで見られていたに違いない。・・・。そう思うと、環奈はどうしようもない羞恥心に襲われ、一つ屋根の下で暮らす義理の父親、勇蔵とこれからどんな顔で接すれば良いのか分からなくなつた。浴室で環奈が羞恥に震えていると、シャワーの音に紛れて洗面所の方からガサガサという物音が聞こえた。誰かいるの？環奈は、さつき自分の裸を覗いていた勇蔵が興奮して、洗面所に入つて来たのではないかと思ひどく慌てた。このまま浴室の中まで入つてきたらどうしよう。・・・。同居生活を始めてか

ら義理の父親である勇蔵が自分のことを厭らしい目で見ているのは良く分かっていた。それでも、愛する夫の親である以上、そのことはなるべく気にしないようにして、仲良く暮らそうと頑張っていたのだ。

しかし、夫が単身赴任となりこの家を出ていつてからというものの、勇蔵の態度はエスカレートしていき、もしかしたら一線を越えてくるかも知れないという不安は、環奈の胸の奥にずっと潜んでいたのだ。そして今、その不安は急速に膨らみ、環奈は洗面所の方から聞こえる物音に全集中して耳を傾けていた。

すると、暫くして物音は止み、誰かが脱衣所から出て行くのが分かった。その瞬間、環奈はホッと胸を撫で下ろした。もしかしたら興奮した勇蔵が浴室に乗り込んできて襲われるかも知れないと怯えていた心は、ゆっくりと心拍数が落ち着きを取り戻そうとしていた。ただ、さつき洗面所から聞こえてきた物音は



一体何だったのか、そこに居たのは果たして  
本当に勇蔵だったのか、そして何が行われて  
いたのか、環奈の心にまた新たな不安が込み  
上げ、シャワーを止めると恐る恐る浴室の扉  
を開いていった。  
洗面所に出た環奈は、すぐに異変に気付い  
た。洗面所の棚にあるはずのタオルも、さつ  
き脱いだびしょ濡れのワンピースも下着も何  
処にもなかったのだ。さつき洗面所から聞こ  
えた物音は、おそらくそれらを盗んでいった  
時に起きたものなのだろう。環奈は、自分の  
裸を見て興奮した義理の父親が盗んでいった  
のかと羞恥と恐怖に体を震わせながら、これ  
からどうすれば良いか悩んだ。着替えの服や  
下着は二階の自分の部屋に行かなければなく  
それはつまり、素っ裸のまま洗面所を飛び出  
し、階段を上って二階に行かなければいけな  
いことを意味していた。  
どうしよう。幾ら家の中とはいえ、  
一つ屋根の下には義父や義姉がいて、素っ裸

で飛び出したら彼らに見つかってしまふ恐れもあり、環奈は二階の部屋に着替えを取りに行き、覚悟がなかなか持てなかった。そうして数分が過ぎ、環奈が素っ裸のまま洗面所で立ち竦んでいると、ピンポンと玄関のチャイムが鳴り響く音が聞こえた。  
「はい」  
洗面所の扉の外から義姉の声が聞こえたかと思ふと、扉のすぐ前を歩いて玄関に向かう足音がした。  
今出るしかないわ・・。二階へ向かう階段は玄関から離れた場所にあるため、今なら玄関に向かった義姉に見つかると心配はなかった。ついに覚悟を決めた環奈は洗面所の扉を開けると、裸のまま廊下に飛び出したのだっ

た。

■ 海老沢薫 B L O G

<https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/>

・ ・ ・ 「羞恥」「露出」「辱め」をテーマとした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ そのほか SNS

[https://x.com/ebisawa\\_K](https://x.com/ebisawa_K)

[https://www.instagram.com/kaoru\\_ebisawa/](https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/)

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不祥事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>